とこしえの魔女

とこしえの魔女

りのりあ

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15648125

カミュベロ

カミュの葬儀から始まるカミュベロです。

Table of Contents

とこしえの魔女

　カミュは最期まで、神に祈ることはなかった。
　それでも教会で葬儀を行うことになったのは、生前の彼が決して神や信仰を忌み嫌っていなかったことと、若い時分には教会の世話になっていたことが理由である。
　参列者は数えきれないほどだった。かつての仲間たちはもちろんのこと、妹の家族や、新しい町でできた友人たち、老若男女を問わず、ユグノア王国において彼に恩義を感じている者は数多く、それどころか外国からも数多の人々が弔問した。
　とりわけデルカダール女王、サマディー国王、クレイモラン女王といったロトゼタシアにおける大国の現国王が集う騒ぎになったのも、当然のことと言える。何しろ彼は世界を救った英雄のひとりなのだ。人の国を束ねる者として、その偉業に敬意を払わぬわけにはいかない。
　葬儀はユグノア国王イレブンが取り仕切った。晩年には近衛騎士の称号を返上し、相談役となっていた片腕の死を看取ったのは、王その人だったと言われている。
　葬儀はユグノアの国を挙げて執り行われた。
　棺は飾り立てられ、カミュの遺体はまるで生きているかのように欠けることなく整然と収められた。それは大きな馬車に乗せられ、多くの騎士と民、数々の王や旅人、盗賊や海賊までもが彼の死を悼んだ。行列は大きなうねりとなりながら王城の前へ辿り着き、彼が生涯仕えた主――同時に相棒であり、親友でもあった――ユグノア王の元へと、棺は掲げられた。
　この頃のイレブン王は、じきに引退を考えていたとされている。ふたりの息子とひとりの娘に恵まれた彼には、さらに多くの孫たちがすくすくと育っているところだった。勇退を後押ししたのは、最期まで彼のことを第一に考えていたカミュその人である。
　彼の死は唐突に訪れた。すべての戦を終えて平穏を得たユグノアで彼の命を奪ったのは、事故である。新造している聖堂の建設現場でのことだった。彼は落下した建材から、たまたま間近を通った一

家を全員押し退け、ひとりで肩代わりになった。死に際までも人を救った彼を讃える声は止むことがない。
　白と青の花びらがとめどなく降っていた。故人は葬儀の希望など何ひとつ遺さず、式を仕立てたのはイレブン王と彼の仲間たちである。白は生まれ故郷のクレイモランに一年を通して降る雪を、青は彼がいつも気にかけていた、今はいない少女と同じ名を持つ花から選んだ。
「憎まれっ子世にはばかると聞くのに。まさか君のほうが先に逝くとはね」
　皺の刻まれた額に掌を触れさせて、王がそんなことをつぶやいたという伝聞が残っている。
　国が喪に服したのはわずか三日である。彼は人々が暗い顔をするのを望まなかった。ユグノアには祝日が一日増えて、裏を返すように二週間に渡るお祭りが開催された。彼のかつての仲間たちや、妹の家族たちはこれを遠慮なく楽しむことで、彼への追悼とした。

◆　◇　◆　◇　◆

　ロトゼタシアではほとんどの場合、人が死ぬと教会によって葬儀が挙げられ、遺体は棺ごと地面に埋められる土葬が採用される。ユグノア王国において死者の扱いは法で決まっており、やはり土葬が義務付けられていた。
　死してからどれほどの期間で埋葬するのかは、明確な決まりがない。腕のいい魔法使いがいることで、遺体を腐らせずに保管することも決して難しくはないためである。
　彼の棺は王城の地下、石壁に囲まれ日の当たらない広い部屋へと安置され、葬儀の続きともいえる祭りが終わり次第、埋葬される手筈となっていた。
　遺体の安置所を守るのは騎士がふたり。ふたり一組で交代しながら務め、彼らは祭りに出かけられない不平などひとつもこぼすことなく任務に従事した。齢七十を越えていた故人の剣には、ついに誰ひとりとして敵うことはなく、騎士にとって彼は永遠に憧れの的のままだったのだ。

祭りが始まって七日目の夜のことである。
石の階段を降りる軽い足音に、警護に当たっていた若い騎士たちが顔を見合わせた。腰に提げた剣を確認してうなずくと、入り口の階段へ向き直る。
足音は三つあった。三人分ではなく、両足と、おそらくは杖をついているのだろう。急ぐわけでも滞るわけでもなく、一定のテンポで階段を降りてくる。
あるいは弔問客である可能性はある。何しろここにある遺体は救世の英雄のものだ。生前の彼に世話になった者は数知れず、葬儀に間に合わず遅れて駆けつけたということもあるだろう。言ってしまえば、どんな英雄であろうがあるのは遺体に過ぎず、賊が入り込む意味は薄いはずだ。
しかし姿を現したのは、ふたりの脳裏によぎった可能性からは外れたものだった。
薄汚れたローブで全身を包んだ子供である。
目深に被ったフードのせいで顔は窺い知れないが、覗く口元は明らかに若く——それを通り越して、幼い。
「子供か？　何用だ」
問われて、不審者は足を止めた。旅でもしてきたのか、使い込まれたブーツが見える。三つ目の足音となっていた長い杖の石突が床について、かつん、と硬質な音をたてた。
「アンタたちに非はないわ。きっと王さまはわかってくれるから、落ち込まないようにね」
フードの下から飛び出したのは、まさに子供の声だ。それも十にもならないような少女のものだった。
「何を言っている。親はどうした。カミュ殿の弔問なら、まずは手続きを踏んで——」
と、騎士たちが油断も露わに近づいたのを、責めることはできないだろう。相手は見るからに幼い子供で、仮に持っているのが魔法使いの杖だとしても、その歳で騎士の障害になりえるような魔法を扱えるとは考えられない。
しかし少女は長い杖を傾けると、ふたりの騎士に向かってまとめて呪文を放った。

「ラリホーマ」
　ユグノアの騎士には、その制式装備の中に呪文への耐性が義務付けられている。これもまたカミュが考案したものだと言われているが、魔物の撃つような毒や眠りの魔法に対して体を保護するためのものだ。
　しかし少女の魔法はそれを遥かに上回る強度で放たれた。杖の先に魔法陣が現れたかと思えば、ふたりの騎士の鎧の隙間に、板金の裏側に忍び込む。たちまち意識を失ったふたりは、一言も発することなくその場に倒れ伏した。
　かつん、と杖が床を突く。
　安室の入り口は、世界樹の描かれた分厚い両開きの扉だった。施錠のされていない扉の前に彼女が立つと、手をかけることもなく開いていく。迎え入れられるようにして、少女は石室へと足を踏み入れた。
　ひどく寒い。石の壁には空気を入れ替えるための格子のついた小さな空気穴があるだけで、人の出入りは正面扉だけに制限されている。侵入を恐れているというよりは、冷気が外に漏れるのを防ぐためだろう。部屋の端の燭台が、彼女を迎えるように小さな火を灯す。
　棺は巨大な氷の台座の上に安置されていた。ユグノアの魔法使いが作った、遺体保全のための氷の魔法である。冷気は白い霧となって足元を漂い、彼の遺体は祭りを行う二週間の間、変わらない姿で保全されるという仕組みだ。
　少女にはやや高い台座へと、近づいていくと足元から氷が迫り上がる。呪文すら必要としない魔法が彼女の靴底を持ち上げて、台座と同じ高さまで持ち上げていた。
　カミュの棺は蓋が閉じられている。まだ釘を打ってはおらず、蓋は持ち上げれば開くだろう。しかし少女は魔法の力で蓋を開けるでもなく、その上に手を這わせた。
　杖を棺の上に置き、その隣に腰掛ける。フードを払うと、現れたのは金色の長い髪だった。眠ってしまった騎士たちがそう感じたように、彼女の容貌は年端もいかぬ子供そのものだ。
　すみれ色の瞳が、黒い棺の表面を撫ぜる。

ふっ、とくちびるが笑みをこぼした。
　小さな手が棺の上で跳ね、指先が、とん、とん、と蓋をノックする。
　愛おしい人の腕に触れるように、髪を撫でるように、その音はいつまでも響いた。

　　　十年前

　齢五十をいくつか越えたカミュだったが、その容貌は若々しく、一見したところ三十の後半ほどにも見える。ユグノアには彼の特徴的な青髪を知らぬ者はおらず、また彼が建国から王のそばにいる重臣であり、世界でも指折りの剣士であり、とんでもなく紳士的で、顔立ちは端正で、さらに独り身であることも知れ渡っている。
　つまり五十を迎えてなお、縁談が止まらない。
「——さて、じゃあ会議はこれくらいにして」
　王の執務室で、イレブンは書類をまとめて羽ペンを放り投げた。大臣たちを全員集めるような会議ではなく、部屋の中にいるのは彼ともうひとり、近衛騎士のカミュだけである。
「何かあるのか？」
　彼よりもいくつか歳下のイレブンだが、もうじきに五十を迎えようとしている。数年前には孫も産まれて、ユグノア王室は順調に繁栄を迎えていた。若くして祖父と呼ばれるようになったイレブンは、しかしこちらもまだまだ若々しい。
「じゃーん」
　書類の一番下から引きずり出したのは、数枚の肖像画だった。いずれも劣らぬ美女ばかりが、カミュの前に並べられる。
「断る」
「まだ何も言ってない」
「どうせ縁談だろ。どこぞのお偉いさんや金持ちの娘との結婚なんて、この歳になってやってられるかよ」
「強要するつもりはないけど、王さまにもしがらみや付き合いって

ものがあってね。超がつく優良物件のカミュをいつまで独り身にさせておくつもりだって、各方面からつつかれてるのさ。ほら、この子なんて好みじゃないか？」
　イレブンが押してよこした肖像画を、一応は受け取る。顔をしかめて眺めると、どう見ても十代後半のうら若き女性だ。ベルベットであろう布張りの椅子に腰かけ、長い黒髪をひとまとめにして、大きな三つ編みを肩口から垂らしている。
「どう？　胸が大きすぎるかな？」
「なんだその判断基準は。若すぎるだろ。オレをいくつだと思ってる」
「五十で十代の奥さんをもらうなんて珍しくもないだろ。頭のいい子だよ。高等教育を受けてるし、会話には困らないと思う。それとも同年代のほうがよかった？　カミュになら娶られてもいいって女性は十代から六十代までいる。選り取りみどりだよ」
「冗談じゃない。全部お断りだ」
「やっぱり金髪じゃなきゃダメか」
　カミュの靴先が、イレブンの座る椅子を蹴飛ばした。
「蹴るぞ」
「蹴ってから言うなよ」
　しょうがないな、と王は見合いのための肖像画をまとめて引き取った。もともと引き受けてくれる見込みなどないつもりだったのだろう。
　大国の王として、粗略にできない縁故が無数にあるのはカミュも心得ている。縁談を断るのはすっかり慣れていて、いわば恒例行事のようなものだ。それは娘を縁談のテーブルに乗せるお偉方もわかっていて、それでも無視できないほど、カミュの存在はユグノアにとって大きなものであるとも言えた。近頃では歳頃の娘たちよりも、その父親のほうに人気があるくらいだった。カミュと娘を結婚させられれば、お家はもう安泰というわけだ。
「さてと、話は終わりか？」
　カミュが席を立つと、イレブンは意外そうに目を丸くした。
「なんだ、急ぎの用事かい」
「いつもだらだら喋ってるみたいに言うなよ。オレはこれでも忙し

いんだぜ」
「最近は後進が育ってきて楽してるって言ってたじゃないか」
「まだまだオレに言わせりゃひよっこなのさ。お前んとこの坊主もまだ鍛え足りないだろ？」
「その辺はあまり気にしてないんだよね。何しろ自分が二十になる前に王座についてるから、いくつで譲ってもいい」
「譲位を考えるなら、準備はしとかねえとな」
「ようやく平和を実感してきたところだからなぁ」
　お疲れ、とイレブンの肩を叩いて、カミュは先に執務室を出た。
　ユグノアの歴史は戦いと共にある。古代の勇者ローシュに始まり、五十年前には一度滅亡の危機へと陥った。さまざまな奇跡が重なって落ち延びた王子イレブンが、滅亡の元凶たる魔道士ウルノーガを討ち、ローシュにすら果たせなかった邪神ニズゼルファ討伐を成したのが、彼が成人したばかりの頃だ。
　ユグノアは着手から三年ほどで新生し、まだ村落と見紛うようなしょぼくれた城跡の真ん中で、王は戴冠した。冠を両手で載せたのは、他ならぬ相棒のカミュ自身だ。
　その頃は仲間の多くがユグノアの再興を手伝ってくれていて、ほとんど思いつきのような戴冠式は全員が見守っていた。
「光の御子、勇者、邪神討伐の英雄に、ユグノアの国王さま。なんだか山盛りね」
　そう言って笑ったベロニカに、
「双賢の姉で英雄のひとり、世界最強の魔法使いで、魔法教室の先生に言われたかないと思うぜ」
　カミュは皮肉げに笑って返したものだ。
　それから三十年余りが過ぎた。今もイレブンのそばにいる仲間はカミュを含めて数人で、周りを歩く人々の顔触れは大きく変わった。あの日笑っていた小さな魔法使いも、もういない。
　それでいいと思っていた。時間が過ぎる、未来へ進むとはそういうことだと知っていた。
　カミュは城を出て、広大な城下町へ向かう。後進はいくら育ててもキリがない。
　誰もが可能性に満ちていて、ユグノアはこれからどこまでもいい

国になれる。

二十年前

　ごつごつと重い音をたてて、廊下を足早に歩く。装飾の少ない厚手のコートの胸元では、わずかな徽章が輝きを放った。後ろへ撫でつけた青色の髪の一房だけが、どれだけ手入れしても頑固に前に垂れる。
　王城の廊下を歩いていたカミュのそばへ、並んだのは同じ歳頃の男だった。栗色のさらさらとした髪を肩口よりやや下まで伸ばし、細身の洒脱な格好をしている。
「陛下」
「よしてくれ」
　カミュの言葉に、イレブンは即座に首を振った。二十年来の長い付き合いだ。彼が何を言いたいのかはすぐに飲み込めた。周りに人の姿はない。
「イレブン、何か問題か？」
「問題ってほどじゃない。強いて言えば不安かな」
「オレが率いる騎士団だぜ。魔物の数百匹に負けるような鍛え方はしてないさ。今回はグレイグの旦那も来てくれるしな」
「君もグレイグも信用はしてる。ただ七年前のような悲劇を繰り返すわけにはいかない」
　ふむ、とカミュは髭のひとつも生やしていない顎を撫でた。不惑をやや回った彼は、かつての邪神討伐の旅よりも少し背が伸びて、体の筋肉量も増えた。それでも筋骨隆々とした戦士然たるグレイグには遠く及ばないものの、腰に剣を差していても違和感がない。
「まだ助っ人がいるか」
「こんな時にベロニカがいればね」
「よせよせ。いないヤツを頼るのはいかにも凶兆だぜ。クレイモランに応援を頼んでみるさ」
「マヤのところ？」

「そういうことだ。精鋭を何人か送ってもらえば、ベロニカの代わりにはなるだろ」
「間に合わせてくれ」
　歩きながら話していたイレブンは道を違え、廊下を折れていく。カミュは踵を合わせてそれを見送り、しばらく黙考した。
　前後を振り返っても、人の気配はない。手近な扉のひとつを開けると、無人の部屋へと入り込む。
　沈みかけた西日が差し込んでいた。窓ガラスを貫いて、赤光が白を基調とした調度品を照らしている。カミュは椅子を引いて腰を下ろすと、腰の剣を机に置いた。
　こつん、と小さな音が窓辺を叩いた。見ると出窓には、夕日を遮るように小さな人影がちょこんと座っている。窓が開いた様子はなかったが、彼女はそこにいた。ぶらりと揺れた小さな足が窓枠の下を叩いて、こつんともう一度鳴る。
「七年前？」
「どこから知ってるんだ？」
　ベロニカは肩を竦めて、手に持っていた杖をするりと滑らせる。石突が床を叩いて、赤い宝玉が出窓に寄りかかった。
「ユグノアが、なんとか族っていう魔物と戦争状態ってことくらいよ。もう長いんでしょ？」
「それが七年なのさ」
　カミュはため息をついた。
「この国は、もう十五年ほど前から魔物たちとの融和を進めてる。のは、知ってるよな。オレたちは邪神を倒したが、それで魔物が絶滅したわけじゃねえし、世界中から争いごとのすべてが消滅したわけでもない。イレブンは魔物ともわかり合って、共存することが可能なんじゃないかと考えた」
「人の言葉を解する魔物もいるものね」
　楽しげに聞くベロニカは、何度も頷いた。邪神討伐の旅を共に果たした彼女は、二十年前と寸分変わらぬ姿で窓枠に腰かけている。三つ編みにした長い金髪も、すみれ色の意志の強い瞳も、まるで絵画に閉じ込めた一瞬のように永遠を保っていた。
「知性があるならわかり合える、ってのはちょっと言い過ぎだが、

わかり合える可能性はある。実際、温厚な種族の魔物とは手を取り合えてる。だが一部、どうあってもわかり合えない種族もいる」
「価値観の違いね」
「文化圏の違いだな。距離を置きたいが、向こうは人間を食いたい。食われるわけにはいかないから、戦う。シンプルだろ」
「ユグノアもなかなか落ち着かないわね」
「当面は、これで最後さ。恒久の平和なんて約束しようもねえが、オレの生きてる間には、今よりでかい戦争は起きない。起きないように火種から潰す」
　そ、とベロニカは満足したように微笑んだ。
「カミュが死ぬ時は、きっと誰かのために戦って前のめりに死ぬんでしょうね」
「おいおい、縁起でもねえ。オレはまだ死ぬ気はねえし、そんなにいいヤツでもねえよ」
「まだそんなこと言ってるの？　アンタはいいヤツよ。出会った時からずっと、誰かのためだけに武器を取ってるじゃない」
「へいへい。そういうことでもいいぜ」
「クレイモランのマヤって？」
「あのマヤだ。二十年も前に、お前が魔法を教えただろ。しばらく前にクレイモランに魔法学校を作ったのさ。あそこには魔女もいるからな。今じゃあの国はちょっとした魔法大国だぜ」
「あら。魔女ならユグノアにもいるわよ」
　そう言って笑みを湛えるベロニカは、確かに人ならざる者のようだった。クレイモランの氷の魔女も、あの姿を保ったまま千年を生きているという。人間であることを捨てた魔法使いといえば、かつてデルカダール王に取り憑いていた魔道士ウルノーガもそうだ。ベロニカは彼らと同じ、人とは違う領分にいた。
「手伝ってくれるか？」
「あたしがいないと困る？」
「お前がいなくても勝てる。でもお前がいれば、死ぬ人間が減らせる。土下座してでもお出まし願いたいね」
「いいわよ。はい、じゃあ、契約」
　ベロニカは出窓に座ったまま両腕を広げる。カミュは立つと、彼

女の前に進み、正面から抱擁した。小さな手が背中に回り切るわけもなく、子供そのものの柔らかな頬がカミュの鼻先に押しつけられる。
「約束は覚えてる？」
「当たり前だ」
「嫌になってても果たしてもらうわよ」
「おお怖え。任せとけ、今から楽しみだ」
　体が離れる。紅潮した頬に泣き笑いのような顔を乗せて、彼女は言った。
「マヤたちを呼んで。目くらましにさせてもらうわ」
　進軍は五日後に始まった。
　王都を出たユグノア騎士団は王と騎士団長のカミュが率い、その隣にはデルカダールの援軍と将軍グレイグが並ぶ。後続にはクレイモランの魔法部隊が続き、魔物との衝突はさらに三日後、かつてバンデルフォン王国が広がっていた平原でのこととなった。
　戦果は華々しく、ユグノアの被害は軽微。前線を押し上げた剣士たちを守る炎の膜のような魔法が大いに役立ち、紫色の魔力の波動が、押し寄せる波のような魔物の大群を打ち払った。
　王が勝利を宣言するまでは一昼夜。凶悪な魔物のほとんどを打ち倒し、戦いに消極的だと思われた者については捕虜として、戦争は終わりを迎えた。

三十年前

　ユグノア王の祖父が逝去したのは、よく晴れた日の朝のことだった。
　国葬は大々的に行われた。積み重ねるように順調に老いて、眠るように逝った彼を慕う者は数多く、各国から大勢の人々が駆けつけた。
　旧ユグノアを知る王家の最後のひとりであり、老年にして勇者と共に邪神を滅ぼした英雄ともなった祖父の死に、ユグノア王は止め

どなく涙を流して、最後には大輪の笑顔を見せた。何しろ祖父は善き行いを数え切れないほど施し、あらゆる人々に愛されて逝ったのだ。それを嬉しそうに喜ぶ祖父の顔が浮かんでは、泣いてはいられなかった。

　葬儀の夜、カミュは珍しく泥酔したイレブンを妃に放り投げて、城下町へと抜け出した。黒い外套に身を包み、大きな訃報に浮き足立つ町をするすると滑るように移動する。フードを下ろして特徴的な青髪を隠せば、彼に気づく者はそうそういない。

　下町の小さな酒場に入り、さほど繁盛していないカウンターの隅に腰掛ける。ウイスキーを一杯頼むと、肴もなしにゆっくりと傾けた。

「よいしょ」

　と、わざわざ声を出して、隣のスツールに小さな人影がよじ登る。マスターがちらりと見たのは、その姿が明らかに子供だったからだろう。カミュがフードを半分剥がして顔を覗かせると、マスターは何も言わずに仕事へ戻った。

「お爺ちゃん、行っちゃったわね」

「なかなか心地良さそうな最期だったぜ」

「どんな風だったの？」

「朝起きて、お気に入りのメイドに案内を受けて飯を食った。バルコニーに出て、ちょうど城下町が一望できるところで椅子に座って、茶を飲んでな。オレとイレブンが両隣に座って、今度の建国祭は――って話を始めた。爺さんはそれを聞きながら、眠るみたいに逝ったよ。楽しそうな、いい笑顔だったな」

　ふふ、とベロニカは声を漏らした。

「すばらしい最期だわ」

「同感」

　カミュは手を挙げてマスターを呼ぶと、ベロニカのために果実を絞ったジュースを頼んだ。それが届くのを待つ間、会話が途切れる。

　何を考えているのかは聞くまでもなかった。

　オレンジの刺された鮮やかなグラスが置かれると、ベロニカはマスターに会釈を返す。

「もう十年も経つのね」
　そう言う彼女の姿は、生まれて十年も経っていないように見える。
「なんだかこのところ、時間が過ぎるのが早く感じるの」
「そいつはオレも同じだぜ。旅を終えて正確には十……四年か？　体感で言えばまだ三、四年って気分だけどな」
「カミュもおじさんになるわけよね」
「おい。まだ三十三だぞ」
「出会った頃より少しは大人になったかしら。あたしにはあんまり変わってないように見えるわ」
「お前のほうがよっぽど変わってねえよ」
「それはそうなんだけど」
　旅を終えて十四年。ユグノアが蘇って十年。ベロニカがみんなの前から姿を消して三年ほどになる。妹のセーニャなどは今でも時折寂しそうにしつつ、姉はきっとふらりと姿を現すだろうと口にしている。だが彼女が皆の前に顔を出すことは、まずありえないだろうと、カミュはすでに知っていた。
　ベロニカはロウのように、穏やかな老いを迎えることはできない。家族に囲まれて安らかに眠ることは決してないのだ。彼女の言葉の端々には、人として生を終えた仲間への羨望が滲み出ていた。
「みんなは」
　それを表には出さずに、ベロニカは言う。
「元気にしてる？　セーニャも、イレブンも」
「ああ。ちょうど今日の葬儀でお前以外全員揃ったからな。あのふたりはもちろん、シルビアもグレイグも健康そのものだったぜ。マルティナは涙が止まらなかったみたいだけどな」
「ふたり目のお父さまみたいなものだもの。ちゃんとお別れができたならよかったけど」
「大丈夫さ。もちろん寂しいだろうが、すっきりした顔してたからな。みんなお前の話をしてたよ」
「あたし？」
「そりゃそうだろ。あのメンバーが集まれば、いなくなったベロニカの話題が出ないわけがねえよ。アイツはどこ行ったんだろうなっ

て、毎回すっとぼけるオレの身にもなってくれ」
「お爺ちゃんのお墓ができたら、こっそりお墓参りくらいはするつもりよ。でもあたしが来たってバレちゃうと、みんなに期待させちゃうでしょ？」
　ベロニカの覚悟をないがしろにするつもりはなかったが、カミュは複雑そうに眉根を寄せた。彼女の苦悩を完璧に共有することはできない。家族にまで姿を見せないと決めたことを、軽々しく非難するのはためらわれた。
「誰も、お前を怖がったりしないぜ」
「みんなはね」
　一言で済ませて、グラスを傾ける。
　何年も、何十年も姿を変えない少女に、仲間たち以外の人々がどんな反応をするのかは想像がつかない。しかし誰もが歓迎してくれるわけではないのは間違いないだろう。かつてベロニカ自身が言ったように、そこに魔性を見られれば、いずれは不信を招くことになる。
「寂しくならないか？」
「平気よ。あたしのことを知らない村で、案外普通に生活するふりなんかしたりしてるのよ。また場所を変えることなるでしょうけどね。いずれみんながおじいちゃんやおばあちゃんになったら、もう少し近くに来たっていいわ」
「変身する魔法でも覚えたらどうだ？」
「もう覚えたわ。ときどきユグノアにも来てるのよ。でもずっと維持するのは困難だし、仮にできるようになっても、それでみんなを騙し続けるのは趣味じゃないわよ」
「そうかい。ま、お前らしいよ」
　でしょ、とベロニカは肩を竦めてみせる。
　とりとめのない話がしばらく続いた。彼女が魔法を教えたカミュの妹のことや、イレブンのところに産まれた子供たちの話、それにロウの追悼を兼ねたユグノア建国祭について。クレイモランの氷の魔女とはときどき話していて、ベロニカは千年を生きる心構えを聞いたりしているらしい。変化は乏しく、穏やかに過ごしているようだった。

ジュースを飲み終えて、ユグノア銅貨を数枚置くと、ベロニカはスツールから飛び降りた。立てかけていた愛用の杖を握る。
「じゃあ、そろそろ」
「おう。またな」
「またね」
　ベロニカを追う視線はない。
　やがて、いつの間にかいなくなっていた子供に気づいて、マスターがきょろきょろと視線を巡らせた。

　　　三十三年前

　カミュは走っていた。
　王宮の廊下を、城門を駆け抜けて、城下町へと降りても足を止めない。朝が間近に迫っており、一番暗く寒い時間で、町はまだ眠ったままだ。息が白く濁り、それを切り裂くように体を前に進める。
　手には羊皮紙が一枚。
　ブーツがまだ新しい石畳を蹴って速度を上げる。大通りを南下し、馬車道を横断して、靴音だけが響く。
　開けられたままの城壁に近づいて、門が開いていくのが見えた。夜の番をしていた兵士がカミュに気づいて顔を向ける。門を潜ろうとしているのは、赤い旅装束に身を包んだ見慣れた背中だった。
「ベロニカ！」
　声を張り上げると、彼女は無視しなかった。兵士に一言告げて、道を戻ってくる。
　追いついて、カミュはようやく速度を緩める。上がった息を整えながら、すみれ色の目を見下ろした。
「おはよ、カミュ。早起きなのね」
　平然としたベロニカに、カミュは手に持っていた羊皮紙を突き出す。
「なんだよ、これ」
「読んでないの？」

「読んだから言ってんだろ」
「そのままよ。さよなら、って書いてるでしょ」
　カミュは羊皮紙を放り投げた。
「わけわかんねえ。説明しろ」
「さよならっていうのはね、挨拶よ。お別れの挨拶」
「なんでお別れなんだって聞いてんだよ」
「薄々気づいてるんじゃない？」
　試すように言う彼女の姿を見れば、カミュは簡単に否定もできなかった。
　初めて見た時からまるで変わらない、六、七歳程度の小さな子供の姿をした魔法使いは、すで人間であることを諦めているようにも見える。
　夜明けの薄明かりが東の空に差し込み、空は赤紫に染まりつつあった。
「使命の旅から何年が過ぎたかしら」
「数えてねえ。十年くらいじゃねえか」
「大体そんなものよね。あたしがこんな姿なのも、大体それくらい」
「預言者にもらったペンダントを使えば、一時的には戻れるんだろ」
「ほんの一瞬よ。あれをいくら研究したところで、結果は変わらないわ。あたしは年齢を吸い取られると共に、時間を狂わされたの」
　歳を取らないみたい、とつぶやいた言葉を聞いたのは、もう何年も前のことだ。そんな瑣末なことを気にするような仲間はひとりもおらず、ベロニカは小さなままでも、いつかそれが解消されて歳を取るようになっても、どちらでも構わないと、誰もが口を揃えた。
　しかしそれは、ベロニカと親しい人々の声だ。ユグノア王のそばにいる魔法使いが永遠に子供の姿であることを、眉をひそめて話す声がないとは言えない。それがやがて化け物を見る恐怖に変わり、それをそばに置く王への不信へと変わることを、彼女は恐れていた。
「歳を取らねえなんて便利だろ」
「便利な面もあれば不便な面もあるわ。人の多いところに住むのは

勇気がいるしね」
「リーズレットみたいな魔女になったってことだろ？　アイツみたいに堂々としてりゃいいじゃねえか」
「初めから魔女として現れたリーズレットと、双子の妹にどんどん置いていかれるあたしじゃ、立場が違うのよ」
「お前を怖がるヤツらなんて黙らせれば――」
「カミュ」
　ベロニカは遮って、苦く笑った。
「あたしがつらいのよ」
　反論をなくして、カミュはベロニカを見つめた。
　ここにいて欲しいのはカミュのわがままだ。ベロニカと会えなくなるつもりなんてまるでなかったのだ。それでも、それが彼女を苦しめるのであれば、無理強いはできない。カミュがそう考えてしまうことも、頭のいいベロニカは見抜いているのだろう。
「ずっと……逃げ回るのか？」
「わからないわ。時間はたくさんあるもの。うまく立ち回る方法が見つかれば、他のやり方に変えるかもしれない」
「ひとりで、お前は平気なのかよ」
「もちろん、平気よ」
　ニヤリと、わざとらしく笑う。
　それが平気なヤツの顔かよ、と、笑い飛ばしてやりたくても、うまく声が出ない。それでも態度には出ていたのだろう。彼女は困ったように頷く。
「寂しくても、慣れなくちゃ」
　ベロニカは目を逸らした。
「あたしが死ねないのなら、あたしはみんなの死を見ることになるわ。だったら少しでも早いうちに、距離を置きたいの。じゃないときっと、耐えられない」
「泣けばいいだろ」
　カミュは吐き捨てるように言った。
「誰と別れることになったって、泣き喚いていいんだ。誰だってそうだろ。誰だっていつかは――」
　死んでしまう。

それが当然だと言えなかった。
　いつか死の訪れない生き物が、目の前にいる。ベロニカは当たり前に歳をとって、当たり前に死んでいきたかったのだ。それが許されないことに気づいて、いつかは最後のひとりになってしまうことを恐れている。泣いたとしても、慰め合える者もいなくなるのだとしたら、そんな未来を選べとは言えなかった。
「ね。だから行くわ。ユグノアはもうきっと大丈夫だから」
「まだなんにも終わってねえよ」
　カミュは背中を向けようとするベロニカに、慌てて声を上げた。
「魔物との共生までの道のりは長いし、町だってまだ予定の半分しかできてねえ。王室の安定にも、騎士団の設立にもまだまだ力がいる。お前みたいな強力な魔法使いがいなくなったら困るんだ」
「ふーん。でもあたしじゃなくたって、後任はいるわよ」
　ベロニカは半身振り返り、つまらなそうな顔をする。カミュは頭を掻いた。
「お前、お前なあ」
「あたしがこうなったのも、命の大樹のお導きなのかもしれないわ。だったらまだ何か使命があるのかもしれない。でもそれは、もう人の手でどうにでもなるユグノアにはない」
「ベロニカ」
　踵を返そうとするベロニカの腕を、カミュは掴んだ。
「だったらなんで、オレの枕元に手紙なんて置いたんだ。オレなら気づいてる追いかけてくるかもしれないと思ったんじゃねえのかよ。追いかけてきてほしいって思ったんじゃねえのか？」
　む、と頬を膨らませて、彼女は目を合わせない。
「そんなこと言う？　レディーに聞くようなことじゃないわ」
「お前がいなきゃ困るんだ」
「代わりはいくらでもいるわ」
「いない。魔法使いの代わりがいくらいても、オレはお前がいい」
　みるみるうちに、ベロニカの頬に赤色が差してくる。渋々振り返った彼女の目には、薄く涙が溜まっていた。
「でも、あたしは、小さいままだから。カミュにも迷惑をかけたくないの。迷惑なんかじゃない、なんて言わないで。小さいあたしと

おじいちゃんになってまで一緒に過ごす？　何を言われるかわかったものじゃないわよ。ユグノアの重臣がそれじゃ、あたしが困るの」
「だったらオレも連れて行けよ」
　はあ？　と声にこそ出なかったものの、ベロニカの口は明らかにそう言いたげな形をしていた。
「お前は天才魔法使いなんだろ。今は魔女か？　どっちでもいいや。ベロニカが不老不死になった魔法を、ベロニカが覚えて、オレにかけてくれ。そうしたらもう、お前はひとりじゃない」
「アンタ、何言ってるかわかってるの？」
　ベロニカは先ほどとは違う理由で顔を赤くして、カミュに指を突きつけた。
「歳を取らなくなるのはいいことばかりじゃないのよ。人前には簡単に出られなくなるし、家族が老いていくのを見ることになる。自分だけ若くて楽しいのなんて最初の数年よ。いつかひとりになるって、ずっと怖くて、何も考えたくないって、怯えるように……」
　尻すぼみに、ベロニカの声は小さくなっていく。その目には涙が盛り上がっていった。ぱちんとまばたきをすると、堪えきれずに雫が頬を伝う。彼女は弱気な顔など見せなかった。食ってかかるように目つきを鋭くして、口元が震える。
「ならない。オレがいる。オレにはお前がいる」
「バカじゃないの」
　ベロニカは俯いた。
　ぽたりぽたりと雫が石畳を濡らす。
「ほんと、バカ」
　小さな靴が、ごまかすように地面の涙滴を踏む。カミュは膝を折って、ベロニカの目線に合わせた。
「ただし、条件がある」
　両手で顔を覆っていたベロニカは、睨むようにカミュを見つめた。
「何？」
「オレはイレブンもマヤも見届けたい」
「当たり前よ。アンタの相棒と妹を見捨てたら、あたしが承知しな

いわ」
「ここまで関わったユグノアも、できる限りは、見ておきたい」
「うん」
「だからまあ、何十年かは、待たせてもいいか？」
「締まらないヤツね」
　ベロニカは口にぐっと力を入れると、何かを堪えるようにしてゆっくりと息を吐いた。おずおずと両手を広げて、首を抱くようにして抱擁する。カミュは笑って、小さな背中に手を回した。
「ありがとう。すごく、うれしい」
「そいつはよかった」
「これは、その、契約よ。約束でも、どっちでもいいわ。つまり、使命よ。あたしたちの」
「おう」
「いつかカミュを迎えに来るわ。それまでに世界最高の魔女になる。よぼよぼのアンタを若返らせて、ずっと歳を取らないようにするの。悪い魔女だわ」
「死ぬ前に来てくれよ」
「死んだ後でもいいじゃない。命のひとつやふたつ、あたしは取り戻してみせるわよ」
「怖えことを言うヤツだな。でもまあ、それでもいいや」
　抱き締めると、細い腕が精一杯力を込める。背中に負った杖がカミュの肩に寄りかかるように倒れた。
「じゃあオレが死んだら、棺桶をノックしてくれ。飛び起きる」
　ふふ、とベロニカは声を漏らした。
「なんだかあたし、死神みたいね」
「楽しみすぎて早死にしないように気をつけねえとな」
「バカ。ちゃんと長生きしなさい」
「努力する」
　でも、と、つぶやいて、ベロニカは体を離した。目を真っ赤にして、小さな魔女は首を傾げる。
「本当にいいの？」
　不安げな顔に手を当てる。掌で涙を拭うと、本当に幼い子供のようだ。とこしえを生きる魔女にしては拙い表情に、カミュは笑いか

けた。
「まあ、いいだろ。一生分は好きにさせてもらうんだ」
　濡れた金髪をかき分けて、カミュはベロニカの額にくちづけた。
「おまけの永遠くらい、お前にやるよ」